

# 現代中国語「SVOle」構文の意味と機能について

毛 興華

## 要旨

中国語の文末助詞“了”は文法研究や教育現場において、その意味機能の複雑性や用法の多様性から従来から大きな課題となっている。本稿は中国語の基本構文の一つである「NP<sub>1</sub>+VP+NP<sub>2</sub>+了」(本稿では SVOle)を考察対象とし、その使用実態から先行研究における文末助詞“了”の意味機能に関する中心的な記述である「変化・新状況の出現」や「現時関連状況」の内実について考察した。結論として、単独の SVOle 文は主題 S の「変化」を表し、特定の文脈または文脈の存在が提示されている SVOle 文は語用論的前提の「変化」を表す。また、achievement の事象構造を有する SVO による SVOle 文は、「現時関連性」を捨象し「新状況発生の報告文」や仮定・条件節に用いることもできる。

**キーワード：**中国語文末助詞“了”，文の主題，構文の意味，現時関連性，事象構造

## 1. 先行研究と問題提起

### 1.1 中国語文末助詞“了”についての先行研究

中国語の文末助詞“了(以下では le<sub>2</sub> と記す)”<sup>1</sup>の意味機能については、従来「新状況の出現」や「変化の既実現」を表すという記述が一般的で(呂 1980、木村 2012 など)、また Currently Relevant State (現時関連状況)<sup>2</sup>を表し、perfect marker としてある状況が発話時に密接に関連することを表すと考えられている(Li & Thompson 1981 など)。

(1) 我 喝(了) 3 杯 咖啡 了。 [私はもうコーヒーを3杯(も)飲んだ。]

1SG 飲む<sub>P</sub>-le<sub>1</sub> 3 CL コーヒー le<sub>2</sub>

例えば(1)では、「私は3杯の珈琲を飲んだ」という事態は変化・新状況として実現し、発話時の状況に関連付け「たくさん飲んだ」などの会話の含意を表すことができる。

しかし従来の記述では、(2)(3)のように発話時における「変化の既実現」と見なしうるものの、一般には成立し難いと思われる SVOle について十分に説明できない。

(2) \*张三 摔-碎 (2 个) 花瓶 了。 [張三は花瓶を(2本)割った。]

張三 落とす-割れる 2 CL 花瓶 le<sub>2</sub>

(3) ??小李 在 厨房 包 饺子 了。 [李くんはキッチンで餃子を作った。]

李くん ~で キッチン 包む 餃子 le<sub>2</sub>

本稿では  $le_2$  を用いる中国語の基本構文の一つである  $SVOle^3$  に焦点を当て、 $le_2$  に関する従来の記述では説明し難い用例の意味論や機能論的特徴を分析することで、いわゆる「変化・新状況の出現」や「現時関連状況」の内実について明らかにする。

## 1.2 問題提起

### 1.2.1 複合動詞「VR 構造」との共起について

木村 (2012) は  $le_2$  は何らかの「変化」が参照時に「実現済み」であることを表し、*telic* な動作を含む(4)はそうでない(3)より変化義を読み取りやすく  $le_2$  に馴染むとした<sup>4</sup>。

(4) 小李去厨房包饺子了。 [李くんはキッチンに餃子を作りに行った。]

しかし、(2)(5)は *telic* な事象を表す「VR 構造」<sup>5</sup> を述語に用いており、意味的にもとりわけ(4)より変化義を読み取り難いとは考え難いが、かなり不自然である。

(5) \*张三 洗-干净 (1件) 衣服 了。 [張三は (1着の) 服をきれいに洗った]

张三 洗う-きれいだ 1 CL 服  $le_2$

一方、同じように「VR 構造」を述語に用いる(6)は自然である。

(6) a. 张三 喝-醉 酒 了。 [張三は酒を飲んで酔っ払った]

张三 飲む-酔う 酒  $le_2$

b. 我 吃-完 饭 了。 [私はご飯を食べ終わった]

1SG 食べる-終わる ご飯  $le_2$

このように、述語動詞は *telic* でも  $SVOle$  は必ずしも成立せず、「変化義を読み取りやすい  $SVOle$  が成立する」という従来の記述が正しいとしても、判断基準が不明である。

### 1.2.2 adjunct との共起について

(7) A: 今天我请你下馆子吃火锅! [今日レストランで火鍋をおごるよ!]

B: (同住的) 小李在家包饺子 $le_2$ 。 [(同居人の) 李君が家で餃子を作ったよ。]

B の発話 (以下では 7B) は(3)と同じように定位置での *atelic* な動作を表し変化義を読み取り難いはずだが成立する。もし「変化義の読み取りやすさ」を棄却し、「現時関連性」を  $SVOle$  の成否を決める条件とすれば、(7)では(3)よりも明白な「現時関連状況」が用意されたため(7B)が成立すると説明できる。しかし今度は、木村 (2012) でも指摘されたように「ある状況が問題の場に現然と存在する」ことを表す文末助詞“ne (呢)”との相違点を特徴付けられなくなる。実際、ne を用いた(8)も(7A)の返事として成立する。

(8) 小李在家包饺子 ne。 [李くんが家で餃子を作っているよ。]

(8)は単独でも成立するが(7B)は単独で眺める時はかなり不自然である。従って、やはり(7B)の成立を説明するには「ある状況が発話時に密接に関連する」という(8)と(7A)の関係にも同様に当てはまる「現時関連性」の記述では不十分で、(7B)は(7)で表された状況との関連性からある種の変化義を獲得し成立したと考えねばならない。

これについて楊 (2013) は異なる角度から分析し、SVOle は事態の「発生」そのものに重点を置く「事件文」で、実態発生を伝える上で必ずしも必要でない adjunct は SVOle の成立を妨げる余剰的な情報になり得るとした。また時間や場所を表す adjunct は方式の adjunct よりも「事態発生との関連度」が高く、比較的に SVOle に共起しやすいとした。

- (9) a.他 去 上海 了。 b.他 上星期 买 礼物 了。  
 彼 行く 上海 le<sub>2</sub> 彼 先週 買う 土産 le<sub>2</sub>  
 c.他 在 上海 买 礼物 了。 d.?他 坐 飞机 来 上海 了。  
 彼 ~で 上海 買う 土産 le<sub>2</sub> 彼 乗る 飛行機 来る 上海 le<sub>2</sub> (楊 2013)

楊 (2013) の観点から分析すれば、(7B)と同じように“小李包饺子 (李くんが餃子を作る)”という事態の発生を表す(3)では、adjunct “在厨房 (キッチンで)” は事態発生との関連度が低い文の成立を妨げ、(7)の文脈では“在家 (家で)” は事件発生との関連度が高いので文が成立したと説明できる。本稿では、なぜ(7)では adjunct の「事態発生との関連度」が高くなったのか、また(10b)のように adjunct の添加により逆に SVOle の自然度が上がる現象について分析することで、文脈は具体的にどのように SVOle 文の成否に関与するかについて明らかにしたい。

- (10) a.?小李 坐 飞机 去 上海 了。 b.小李 昨晚 坐 飞机 去 上海 了。  
 李くん 乗る 飛行機 行く 上海 le<sub>2</sub> 李くん 昨夜 乗る 飛行機 行く 上海 le<sub>2</sub>

### 1.2.3 「現時関連性」を読み取り難い SVOle について

- (11) a.张三杀人le<sub>2</sub>。 [張三は人を殺した。]  
 b.\*上个月10号, 张三杀人le<sub>2</sub>。 [先月10日、張三は人を殺した。]  
 c. 上个月10号, 张三杀人le<sub>1</sub>一个人。 [先月10日、張三は (一人の) 人を殺した。]

(11)について、従来の分析では発話時の状況に関連付けられない perfective marker である le<sub>1</sub> を用いた(11c)は「過去のある時点においてある出来事が発生した」ということを客観的に述べる「事態叙述文」として自然である。これに対し、「現時関連性」を要求する perfect marker の le<sub>2</sub> を用いた(11b)では、「先月10日」という時間表現の添加によって、発生した事態の発話時との関連性が読み取り難くなり、文が成立しないと考えられる。

しかし同じ時間表現を伴う(12)は自然である。(12)では朝鮮民主主義人民共和国 (以下では「朝鮮」と記す)の指導者は発話時に北京にいるかどうかについて言及しておらず、むしろ「先月10日に来た」という事実から発話時に既に北京を離れた可能性が高い。

- (12) 上个月10号, 朝鲜领导人来北京le<sub>2</sub>。 [先月10日、朝鮮の指導者が北京に来た。]

さらに(11b, c)と対照的に、(12)に移動方式を表す adjunct を付け加えた場合、「先月10日」という時間表現を伴う(13b)は、逆にそうでない(13a)よりも自然に感じられる。

- (13) a.?? 朝鲜领导人 坐 飞机 来 北京 了。  
 朝鮮 指導者 乗る 飛行機 来る 北京 le<sub>2</sub>

b. ?上个月 10号, 朝鮮 领导人 坐 飞机 来 北京 了。

先月 10日、朝鮮 指導者 乗る 飛行機 来る 北京 le<sub>2</sub>

このように、(11b)(12)(13b)に見られる容認度の違いが「現時関連性」とどのように関わっているかについて、先行研究では説明できない。

#### 1.2.4 仮定・条件節に現れる SVOle について

前節の現象にも関連しているが、一般には「現時関連性」を有する perfect marker とさされている le<sub>2</sub> は完了を表す le<sub>1</sub> と違って、従来仮定・条件節に現れ難いと考えられてきた。

(14) 我 吃了 饭 (\*了) 就 去 找 你。 [ご飯を食べたら会いに行く]

1SG 食べる-le<sub>1</sub> ご飯 le<sub>2</sub> すぐに行く 会う 2SG

しかし実際、(15)で示されるように、一部の SVOle は仮定・条件節にも現れうる。

(15) a. 你 到 车站 了 给 我 打 电话。 [駅に着いたら電話をくれ]

2SG 着く 駅 le<sub>2</sub> ~てくれる 1SG かける 電話

b. 我 吃-完 饭 了 去 找 你。 [ご飯を食べ終わったら会いに行く]

1SG 食べ終わる ご飯 le<sub>2</sub> 行く 会う 2SG

さらに、異なる SVOle の仮定・条件節への適合性は、前掲の(11)と(12)の成否条件と平行しているようにも見えるが、両者の間には一体どのような関連性があるのか。

(16) a. \*杀(了) 他 了 就 让 你 入 帮。 [彼を殺したら組織に入らせる。]

殺す-le<sub>1</sub> 3SG le<sub>2</sub> すぐに 許可 2SG 入る 組織

b. 来 北京 了 给 我 打 电话。 [北京に来たら電話をください。]

来る 北京 le<sub>2</sub> ~てくれる 1SG かける 電話

### 1.3 理論的出発点と本稿の仮説

以上の問題を解決するには、本稿は構文文法の考え方が有効だと考える。Croft (1998) は構文が語彙カテゴリーよりもアプリアリな存在で、語彙の事象構造について強制的な解釈力を持つと指摘した。また Taylor (1998) によれば、構文の意味が各構成部分の意味価を構文全体の意味に適合するよう強制解釈する際、それらの項目の一般的な意味記述に含まれていない解釈まで「押し付け」、各構成部分間の固有の他動性関係や文の事象タイプを変えられると考えられている。例えば、英語では以下の例がある。

(17) Every morning the Queen stood in front of her magic mirror and said: "Looking glass upon my wall, Who is the fairest one of all?" (M.Mayer, *Favorite Tales from Grimm*)

(18).....there stood the Queen in front of them, with her arm folded, frowning like a thunderstorm. (L.Carrol, *Alice's Adventures in Wonderland*)

物理的世界において客観的に分析した場合、the Queen は紛れもなく意志を持った人間である。そして(17)では the Queen は動詞の *stood*、*said* の外項であり動作主である。し

かし(18)では、the Queen は一種の存現表現である There 構文において意図性は捨象され、stood の内項として「彼らの前にいる」という存在だけが客観的に提示されている<sup>7</sup>。このように、動作主などの意味役割について、構文の意味を考えずに物理的世界においての意味や動詞の意味だけで考察することは必ずしも有意義ではない。

中国語については、Chao (1968) はつとに中国語では主語は主題で主述関係は題述関係であると指摘した。また Li & Thompson (1981) は、中国語の語順が主に文法的要因ではなく意味や機能的要因に動機づけられると主張した。さらに朱德熙 (1982) は、中国語の主語は発話者が最も関心を寄せているトピックで、英語のように意味役割や他動性関係を第一義に反映するものではないとした。このように中国語では、主語・述語などの統語的カテゴリーは機能的カテゴリー（主題・題述）の性格が強く、ある構文の意味に基づき各構成部分の意味役割について解釈する際に、各項目間の他動性関係に縛られることが比較的少ないと考えられる。

以上のことから、本稿では中国語の SVOle は「変化」や「新状況の発生」を表す一定のアプリオリな解釈力を有する構文であると考えている。具体的には、「現時関連性」を有する  $le_2$  による SVOle は「主題または語用論的前提の変化」を表す。特定の文脈が提示されない単独の SVOle は S の「変化」を表し、S が無標の主題として SVO 固有の他動性関係に関わらず意図性を捨象した Theme と解釈される。この時、SVO で表す事態の発生によって出現したある種の結果が S の変化後の結果状態と解釈される。また、SVOle は文の外側にある語用論的前提（文脈）に関連付けられる場合、SVO の発生によってその語用論的前提に何らかの「変化」がもたらされたことを表す。

また、一部の SVOle 構造は perfect marker としての「現時関連性」を捨象し、発話時の状況に関連付けない perfective marker の動詞接辞  $le_1$  と同じように、従属節に現れたり語用論的前提を含意しない「新状況発生の報告文」に用いたりすることができる。

## 2. SVOle の意味と機能

### 2.1 SVOle の機能論的分類

SVOle 文は、語用論的前提や主題の有無や、主題 S の変化を表すか SVOle の外側にある語用論的前提の「変化」を表すかによって、以下 3 つのタイプに分けることができる。

(19) 第 1 類：主題 S の「変化」を表す

第 2 類：SVOle の外側の語用論的前提の「変化」を表す

第 3 類：新状況発生の報告

特定の文脈に置かれていない単独の SVOle 文では、S は文の主題で SVOle は S の「変化」を表す。このタイプの SVOle は第 1 類で、文全体は S の状態変化を表す achievement 事象の特徴を呈し、その状態変化の内容は SVO<sup>8</sup> で表す事態の発生から想定される。

第 2 類は SVOle の外側の語用論的前提の「変化」を表し、その「変化」がどのような

ものなのかはやはり SVO で表す事態の発生から想定される。

なお実際の談話において、主題は前提の中の指示対象であるため、その変化は必然的に前提にも変化をもたらす。この時の SVOle は第 1,2 類の兼類で(20B)のようなものである。一方(7)のような、S が談話において初出で主題でない SVOle は純粋な第 2 類である。

(20) A: 小李在哪儿呢? [李くんはどこにいるの?]

B: 小李<sub><Topic></sub>去厨房包饺子 le<sub>2</sub>。 [李くんは餃子を作りキッチンに行った。]

第 3 類は「新状況発生の報告」を表し、語用論的前提がほとんど含まれていない。第 3 類 SVOle の成立は一般の「現時関連性」ではなく、発生した事態の「ニュース性」によって保証される。前掲の (12) はこのタイプで、述部に achievement の VO を要求する。これに関連して、条件節の中にも同じく「現時関連性」を有さず、かつ「ニュース性」も要求しない SVOle が現れると観察されている。

本稿では、ある SVOle 文が成立した際に、上記の 3 タイプのいずれかに当てはまると考えている。なお、意味や機能上の違いから、この 3 類の SVOle の成立条件に相違が見られ、ある SVOle 文の成否はどのタイプとして使用されているかによって異なっている。よって、従来の記述では説明できない SVOle 文の成否に関する疑問点は、これらの異なるタイプへの適合性の違いから解釈することが可能であると考えられる。

## 2.2 無標の主題 S の「変化」を表す第 1 類 SVOle

### 2.2.1 単独の SVOle 文は S を主題とする第 1 類 SVOle

前述したように、文脈が提示されない単独の SVOle では S は文の主題である。これは、実際の談話では SVOle の S が心理的焦点 (focus of attention) として後続する発話において照応可能であるのに対し、O の照応が難しいことにも裏付けられている。

(21) A: 我<sub>i</sub>喝 (1 杯) 咖啡<sub>j</sub> le<sub>2</sub>。 [私<sub>i</sub>はコーヒー<sub>j</sub>を (1 杯) 飲んだ。]

B: 那待会儿 (你<sub>i</sub>) 还睡得着吗? [後で (あなた<sub>i</sub>は) ちゃんと眠れるの?]

B': ?? (咖啡<sub>j</sub>) 苦吗? [(コーヒー<sub>j</sub>)は 苦かった?]

このことについて、前述した「中国語の主語は無標の主題」という一般的な傾向に動機づけられていることも考えられるが、(22)で示されているように、le<sub>1</sub> だけを含む文では S は必ずしも主題ではない。

(22) A: 我<sub>i</sub>喝 le<sub>1</sub> 1 杯咖啡<sub>j</sub>。 [私<sub>i</sub>はコーヒー<sub>j</sub>を 1 杯飲んだ。]

B: 那待会儿 (你<sub>i</sub>) 还睡得着吗? / B': (咖啡<sub>j</sub>) 苦吗?

これについて、まず le<sub>2</sub> は perfect marker として現時関連性を有するため、SVOle の成立は関連づけられる「現時 (発話時の状況)」として語用論的前提の存在を要求すると考えられる。そして文の外側に前提が存在しない単独の SVOle では、le<sub>2</sub> は現時関連性を実現させるために、S を関連づけることのできる主題<sup>9</sup>と見なすことを要求すると思われる。

以上では単独の SVOle において S が文の主題になる動機付けについて明らかにした。

ここで大事なのは、第1類 SVOle も第2類と同じように語用論的前提の変化を表すが、後者の前提は文の外側にあるより大きな談話の枠組みや背景情報によって特徴付けられるのに対し、第1類の前提は主題 S そのものであり、従ってその内容も S の語彙的意味や S に関する世界知識にもとづく推論だけによって特徴づけられる。このことは(23)(24)で示されるように、単独の SVOle の意味解釈は S の語彙的意味に大きく関わっている。

(23) 张三吃饭 le<sub>2</sub>。優勢の解釈:<張三はすでに食事を終えた>

[張三は食事をした。] <食事を始めたが、終えたかどうかはわからない>

(24) 病人吃饭 le<sub>2</sub>。優勢の解釈:<食事を始めたが、終えたかどうかはわからない>

[患者は食事をした。] <患者はすでに食事を終えた>

(23)(24)は何れも単独の SVOle 文で、「Sは食事をした」という状況を表し、Sの語彙的意味だけが異なっているが、SVOのアスペクトに関する解釈に明らかな違いが見られる。

以上の現象は「単独の SVOle 文は主題 S の状態変化を表し、その前提は S の語彙的意味や S に関する世界知識にもとづく推論だけによって特徴づけられている」という本稿の主張にもとづき説明できる。具体的には、まず(24)の意味解釈について以下のプロセスが想定できる：①単独の SVOle 文であるため、文主語“病人”は主題として設定される；②第1類 SVOle 構文は S に何らかの変化が起きたことを提示する；③ SVO で表される事態の発生から S の変化を想定するよう SVO の意味について解釈する；④“病人”についての世界知識から「健康状態が原因で食事できない」という状況が想起される<sup>10</sup>；⑤“病人”にとっては“吃饭”という行為を開始さえすれば「食事できない⇒食事できる」という状態変化が確認できる。このとき、行為としての“吃饭”は日常のルーティンとして「食事を終える」という論理的終結点を内含するものの、その終結点が必ずしも実現されなくても良い。一方(23)では“张三”という人名から一般の人間と何か違う特徴を想起することが難しい。普通の人間にとってルーティンとしての食事は、済ませたからこそ<未だ食事していない⇒食事を済ませた>という状態変化が想起できる。このように、単独の SVOle では SVO の表す行為が終了しているかどうかは、その行為がどの段階まで進行すれば S の状態変化が想起しやすいかによって決まっている。もし SVO の開始から終了までのどの段階においても S の変化を想起し難ければ、SVOle の容認度が落ちる。

(25) a. 我喝咖啡 le<sub>2</sub>。[私は珈琲を飲んだ。] b. ?我喝抹茶 le<sub>2</sub>。[私は抹茶を飲んだ。]

例えば(25b)は(25a)に比べれば、幾分不自然に感じられる。これに対して、対応する日本語訳の場合、(26)のような「食べた／飲んだものの種類」を伝達上の焦点とする文脈においては、目的語が「コーヒー」でも「抹茶」でも容認度に差が見られない。

(26) A: 貴方はさっき喫茶店で何を飲んだの? B: 私は 珈琲を／抹茶を 飲んだ。

一方中国語では、(27A)の返事としては SVOle の(27B')よりも le<sub>1</sub> を用いた(27B)が適切である。この事実は、単独の SVOle は S の状態変化を伝達上の焦点とすることを裏付けている。つまり SVOle を用いた(27B')は「S は<ドウナッタ>」という S の変化に焦点

を当てているため、「Sは<ナニヲシタ>」というSの行為や、内項Oの種類を伝達上の焦点とすることが難しく、Oに焦点を当てる(27A)の返事として不自然なのである。

(27) A:你刚才在咖啡厅喝什么了? [貴方はさっき喫茶店で何を飲んだの?]

B:我 喝了 1 杯 咖啡 / 抹茶。 B':?我 喝 (1 杯) 咖啡 / 抹茶 了。

1SG 飲む-le<sub>1</sub> 1 CL 咖啡 / 抹茶 1SG 飲む 1 CL 咖啡 / 抹茶 le<sub>2</sub>

(27B)で示されるように、Oに焦点を当てうるle<sub>1</sub>を用いる場合、(26B)の日本語の用例と同じくOの内容によって容認度が変わらない。これに対し「Sはドウナッタ」を表現の重点とするSVOleの(25)では、以下で示されるようにSVOの発生によってSの変化が比較的に想起しやすい(25a)に比べ、そうでない(25b)は自然さが落ちるわけである。

(25) a.我喝咖啡了。 [私はコーヒーを飲んだ ⇒ 私は眠気がなくなった etc.]

b.?我喝抹茶了。 [私は抹茶を飲んだ ⇒ 私は (...?) になった]

(25)について従来の記述では、(25b)の表す事態は(25a)よりも変化の意味が読み取り難いから比較的に不自然であると説明できる。これは、第1,2類の意味や成否条件をまとめて記述する際に必ずしも不適切ではない。しかしこの説明では、(2)(5)のような変化事象を表すSVOleはなぜ言い難いのかについて説明できず、教育現場においてもSVOleの意味や用法を学習者に把握してもらうことが困難だと考えられる。「単独のSVOleは一般に主語Sの状態変化を表す」という第1類SVOleに関する本稿の主張にもとづき説明すれば、SVOle文の用法も学習者にとってより把握しやすいものになると思われる。

## 2.2.2 第1類SVOle構文の強制解釈力と成立条件

前述したように、第1類SVOleではSVOで表す状況の発生はSの状態変化と解釈され、SVOle全体はachievement事象を表す。この時、Sは意図性を捨象したThemeと解釈され、またSの変化を伝える構文であるため、SよりもOが伝達上の焦点として際立つことはない。これらのことは、(28)で示されるように“不情不願”のような動作主の意図性に関わる副詞が単独のSVOleに馴染まないことや、(21)で示されるように、単独のSVOle文のOは後続する発話において照応し難いことから裏付けられている。

(28) a.\*张三 不情不願地 杀 人 了。 a'. 张三 不情不願地 杀了 两 个人。

张三 不本意にも 殺す 人 le<sub>2</sub> 张三 不本意にも 殺す-le<sub>1</sub> 2 CL 人

以下では、異なる事象構造を有するSVOは第1類SVOleにおいてどのようにしてachievement事象と解釈され、またどのような成立条件や適合性を有するのかを考察する。

A. stateの場合

(29) a. 他 是 大学生 了。 b. 李四 不 喝 酒 了。 c. ??他 在 北京 了。

3SG コピュラ 大学生 le<sub>2</sub> 李四 NEG 飲む 酒 le<sub>2</sub> 3SG いる 北京 le<sub>2</sub>

stateを表すSVOの事象構造は、第1類SVOleの表すachievementの下位事象と重なりSの変化後の状態をコード化しているため、le<sub>2</sub>から「変化」の意味を獲得すれば第1類



SVOle として成立する。但し、この時 S の変化前の状態は SVO から想定できるものでなければならない<sup>12</sup>。(29a)では“大学生”はある変化のスケールを提示している(小学生→中学生→大学生...)。(29b)は否定形で、S の変化前の状態が語用論的前提から読み込まれている<sup>13</sup>。これに対し、静止位置を表す(29c)では、S の変化前の状態は述語の語彙的意味や語用論的前提などによって提示されておらず、第1類 SVOle として成立し難い。

#### B. achievementの場合

- (30) a. 朝鮮 领导人 来 北京 了。                      b. 停电 了。  
       朝鮮 指導者 来る 北京 le<sub>2</sub>                      停電する le<sub>2</sub>

achievementを表すSVOの事象構造は、同じようにachievementを表す第1類SVOleの事象構造に一致するので、言うまでもなく第1類 SVOle 構文への適合性が最も良い。

#### C. activityの場合

activity を表す SVO では S は動詞固有の他動性関係からすれば Agent であるが、前述したように第1類 SVOle では、S は le<sub>2</sub>の「現時関連性」に動機づけられ主題と見なされ、それによって動詞固有の他動性関係から解放される。その上、S は le<sub>2</sub>の表す変化義に動機づけられ、状態変化の主体と解釈される。そして、(23)-(25)について分析したように、activity の SVO による単独の SVOle 文の成否や意味解釈は「S の状態変化」の想起しやすさによって決まる。(31)(32)で示されているように、activity の SVO に継続時間を加え量的なまとまりを持たせることによって SVOle が成立しやすくなることもあるが、「～し過ぎた」という S の変化を想起できなければやはり成立しない。このことから、やはり SVOle の成否はあくまで S の変化の想定しやすさによって決まると考えられる。

- (31) ?孩子玩游戏 le<sub>2</sub>。                                      [子供はゲームをやった。]  
 (32) 孩子玩 (le<sub>1</sub>) 2 小时/\*5 分钟 游戏 le<sub>2</sub>。      [子供はゲームを 2 時間 / 5 分 やった。]

#### D. 単純他動詞による accomplishment

- (33) \*我 今天 早上 喝 两 杯 豆浆 了。      [私は今朝豆乳を2杯飲んだ。]  
       ISG 今日 朝 飲む 2 CL 豆乳 le<sub>2</sub>                                      (木村 2012)

中国語では、目的語位置の裸名詞はunboundedの「類」であり「単純他動詞(VR構造などの複合動詞を除く)+裸名詞の目的語」はatelicなactivity事象を表す<sup>14</sup>のに対し「論理的終結点を含む単純他動詞<sup>15</sup>+数量名形式(数詞+助数詞+一般名詞)」はaccomplishmentを表すと一般に考えられている(楊 2008 など)<sup>16</sup>。つまり、(23)-(25)(32)ではSVOの表す事象はactivityであるのに対し、目的語に数量詞を伴う(33)のSVOはaccomplishment事象を表す。そして(33)でも示されているように「数量名形式」のOを含むSVOleが成立し難いと一般に考えられている<sup>17</sup>。また(34)で示されるように、動詞や数量詞に音韻強勢を置くと(33)の容認度はかなり上がると思われる<sup>18</sup>。(34)の下線部は音韻強勢の部分を示している。

- (34) a. 我喝两杯豆浆了。 (会話の含意：だからもう私に豆乳を勧めないでください)  
       b. 我喝两杯豆浆了。 (会話の含意：私はもうこれ以上飲めないよ)

これについて、中国語の数量名形式は伝達上の焦点になりやすく、談話において往々にして後続する発話の話題になると一般に考えられている (Sun 1988、楊 2013など)。そのため、数量名形式の目的語を含むSVOは主語Sを伝達上の焦点とする第1類SVOleとは基本的に相容れないと思われる。一方、影山 (1996) によればaccomplishment事象に対する捉え方は「行為焦点」と「結果焦点」に分かれている。そして現代中国語では、VR構造は動作の結果を必ず含意し完全な「結果焦点」である代わりに、単純他動詞 (特に単音節動詞) は日本語や英語の対応する動詞よりも上位事象である行為のほうに重点を置き、下位事象の結果に関与する度合いがかなり低いと一般に思われている (影山 1996、楊 2008など)。それ故、(34)のように音韻的手段を用いて伝達上の焦点を目的語から外せば、下位事象を完全に背景化しVO全体または数量詞を除いたVO“喝豆浆”を一つのactivityと見做すことができる。なお(34a)(34b)は、それぞれ「Sが問題となる行為を遂行済み」と「Sが～しすぎた」というSの状態変化に関する解釈で成立可能となる。

#### E. 「VR 構造」の場合

(2)\*张三摔碎 (2个) 花瓶了。 (5)\*张三洗干净 (1件) 衣服了。

(6) a.张三喝醉酒了。 b. 我吃完饭了。

前述したように、中国語のVR構造は完全なる「結果焦点」の形式で、結果の側面が常に前景化されている。申 (2007) は、Rの表す結果の種類からVR構造を[Vの内項の結果叙述][Vの外項の結果叙述][補文関係(Vの相などを表す)]に大別し、それぞれの事象構造について(35)のように記述した。そして、上記の(2)(5)(6)に見られる容認度の差については、(35)の各構造と第1類SVOleとの適合性から説明できると思われる。

(35) a. Vの内項の結果叙述: [x ACT (ON y)] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]

b. Vの外項の結果叙述: [x ACT (ON y)] CAUSE [BECOME [x BE AT-z]]

c. 補文関係: [Event x ACT] RESULTS IN [ [Event x ACT] BE AT-z ]<sup>19</sup>

(2)(5)のRは“碎(割れる)”と“干净(きれいである)”で、いずれも動作Vの内項(花瓶、服)の結果を表し、(35a)の事象構造で示されるようにOの変化が伝達上の焦点となっているためSVOleに相容れない。これに対して、(6a, b)のRは“醉(酔う)”と“完(終わる)”で、それぞれVの外項“张三”とV自身の相に関わり、結果事象に内項の変化を含意しない(35b, c)の事象構造を有するため、SVOleの成立を妨げない。

## 2.3 第2類SVOle

### 2.3.1 語用論的前提の変化を表す第2類SVOle

(7)A: 今天我请你下馆子吃火锅! B: (同住的) 小李在家包饺子le<sub>2</sub>。

(7)では“小李”は談話において初出で(7B)の主題ではない。(7B)のようなSVOleは本稿の第2類SVOleであり、SVOで表す状況の発生によって談話の語用論的前提に何らかの「変化」がもたらされたことを表す。

ここでは、第2類 SVOle の表す「前提の変化」について(7)を例に説明する。まず A さんは少なくとも「①発話時 B は食事の内容について予定がない；②これから B は自分と2人で食事することが可能である；③B は食事の場所について予定がない」といった前提の下で発話したと考えられる。これに対して(7B)は「①' B は食事の内容について予定がある (⇒餃子を食べる) ；②' B は A と2人きりで食事することが不可能である (⇒ [B と小李の2人で] または [A、B、小李の3人で]) ；③' B は食事の場所について予定がある (⇒B の自宅)」といった情報を提供した。これによって、A さんが発話時に B さんと共有していたもりの前提①～③は、①'～③' に取って代わられる。

第2類 SVOle については、第1類と違い SVO の発生を S の状態変化と解釈する必要がないので、単独で成立し難い第1類 SVOle は第2類として自然になることが多い。なぜなら、第2類 SVOle の表す「変化」は第1類のように単一の指示対象に関するものではなく、複数の前提情報に関するものだからである。例えば(7B)は単独で眺めれば第1類 SVOle 構文が適用され、この時「餃子を作る」という動作の遂行は S の“小李”に何らかの状態変化をもたらすことは考え難い。実際“在家”を含まない“小李包饺子了”も成立し難い。そして“在家”も前述したように変化前の状況を想定し難い「静止位置」を表すので、S の状態変化と解釈し難い。その結果、単独の(7B)は(3)と同じように不自然である。一方(7)の文脈では、「李くんが家で待っている」も「李くんが餃子を作った」も、これらの前提を共有していない A さんにとっては立派な「変化」である。

実際の談話では、(7)のような S が主題でない純粋な第2類よりも前掲(20)のような第1,2 類の兼類が多い。これは「主題 S の状態変化」が談話の前提に何らかの「変化」をもたらしたというようなケースである。この種類の SVOle と純粋な第1類との違いは、前述したように後者の主題は SVOle の外側にある語用論的前提に関連づけて特徴付けられないため、その変化前の状態について S の語彙的意味や S 自身に関する世界知識にもとづく推論から想定するか (例えば(24): 病人→食事ができない)、VO (adjunct を含む) の表す事態そのものを今まで S にとって全く未経験の「新状況」と見なすことで「VO という状況を未経験」という解釈を与える (例えば(13a): 飛行機で北京に来た→飛行機で北京に来たことがない<sup>20</sup>) しかない。一方前者では、S がより大きな談話の枠組みや背景情報によって特徴付けられるので、その変化前の状態についての解釈可能性もより広い。例えば(36B)の下線部は前掲の(25b)と同じであるが、(36)の文脈では A の発話は B の変化前の状態について「喉が乾いているかもしれない」という解釈の可能性を提供した。この時“我喝抹茶了”からは「B は喉が乾いていない」という結果状態が想定でき、これは(36A)の発話前提でもある「喉が渴いているかもしれない」という B の状態の変化と見なせるので(36B)は成立する。一方(25b)では、主題“我”の語彙的意味などから、その変化前の状態について「喉が渴いているかもしれない」といったような一時的な状況を想起できず、「抹茶を飲んだ」ことは B にどんな変化をもたらさうかは想定し難い。

- (36) A: 你渴吗? 我给你倒点儿茶吧。 [喉乾いてる? ちょっとお茶入れましょうか。]  
 B: 不用, (刚才) 我喝抹茶了。 [結構です。(さっき) 抹茶を飲んだから。]

### 2.3.2 adjunct の付加について

前掲の(3)(10a)(11b)(13)で示されるように、adjunct を含む単独の SVOle は成立し難いと考えられている<sup>21</sup>。そして前述したように、楊 (2013) は時間や場所を表す adjunct は方式を表すものよりも「事態発生との関連度」が高く SVOle に現れやすいとしたが、なぜ時間・場所を表す adjunct の「事態発生との関連度」が高いかは詳しく述べていない。

- (9) b. 他上星期买礼物了。 c. 他在上海买礼物了。 d. ?他坐飞机来上海了。

これについて、時間や場所は方式と違い、多くの場合実際の時空間に関連付けられる deictic な情報を提供している。そして、本来実際の時空間に関連付けられない単独の SVOle は deictic な情報を含む adjunct の付加により「現時状況」の存在が提示され第 2 類へと転換し、より広い解釈可能性を獲得したと考えられる。つまり、重要なのは adjunct の種類ではなく、adjunct に SVOle を実際の時空間に関連付けさせる情報を含むかどうかである。実際、リアルな時空間に関連付け難い「類」を表す場所詞による adjunct は SVOle と共起し難く、逆に deictic な情報を含ませれば方式を表す adjunct も SVOle と共起する。

- (37) a. ?他在商店买礼物了。 b. 他坐 5 点/途经杭州 的飞机 去上海了。

3SG 店で 買う 土産 le<sub>2</sub> 3SG 乗る 5 時/杭州経由 の 飛行機 行く 上海 le<sub>2</sub>

(3)と(7)や(25b)と(36)からもわかるように、単独で成立し難い SVOle は特定の「現時状況(発話時の状況)」に関連づけることで「変化」に関する解釈可能性が拡大し、第 2 類として自然になることが多い。これは、(9b,c)や(37b)のような、SVOle が deictic な adjunct の付加により第 2 類へ転換した場合も同じである。唯一異なるのは、(7)(36)では「現時状況」は既定の文脈により与えられているのに対し、(9b,c)(37b)における adjunct の付加は、SVOle を実際の状況に関連付けて解釈する可能性だけを提示し、具体的にどのような状況なのかは、聞き手や読み手自身で想定しなければならない。従って、そのような状況を容易に想起できれば文は成立するが、想起できなければやはり容認度が落ちる。

- (10) a. ?小李坐飞机去上海了。 b. 小李昨晚坐飞机去上海了。

例えば、(10a)は adjunct に deictic な情報を含まない単独の第 1 類 SVOle で、(13a)と同じように主題 S の固有の属性について「今まで一度も飛行機で上海に行っていない」という若干無理な設定をしなければ S の変化を表せないので、不自然である。一方(10b)では deictic な時間詞「昨夜」が付加されることで、ある実際の状況に関連づけ解釈する可能性が提示され、また(10b)の場合、(38A)(38A')のような先行文脈が容易に想起できる。

- (38) A: 小李呢? [李くんは?] (第 1, 2 類の兼類)

A': (上海) 分公司的什么事怎么办? [(上海) 支社のことはどうする?] (第 2 類)

B: 小李昨晚坐飞机去上海了。 [李くん はが 昨夜飛行機で上海に行った。]

(38A)では“小李”に「居所が不明」という変化前の状態、(38A')では「上海支社に仕事を処理する人がいない」という前提が提示される。そして(38B)では“坐飞机”は“昨晚”に関連づけ解釈されることで“小李”の発話時の状態について「上海にいる」と想定できるよう寄与している。具体的には、飛行機が現存の交通手段で一番速いことから(38B)に「昨夜出発し、車では発話時に上海に着いていない可能性もあるが」飛行機だから既に到着した」という会話の含意があると想定できる。実際、出発時が発話時から遠く離れる(39)は、“坐飞机”がSの発話時状況の解釈に寄与できず余剰となるため不自然である。(39)\*小李去年1月坐飞机去上海了。 [李くんは去年1月に飛行機で上海に行った。]

以上のように、実際の時空間に関連づけられる deictic な情報を含む adjunct (主に時間・場所) は、単独の SVOle を第2類として解釈するよう動機付けることができる。そして(3)(10a)(13a)(37a)では、adjunct に deictic な情報が含まれないため、文が第1類として adjunct の余剰性に成立を妨げられ不自然になる。また(11b)(13b)(39)は deictic な情報を含む adjunct の付加により第2類への転換が可能であるが、これらの adjunct は意味上、SVOの発生を「語用論的前提の変化」と解釈する際にどのように寄与しているか(楊 2013の説明では「事態発生とどのように関連するか」)は想定し難いのでやはり不自然である。

## 2.4 第3類 SVOle : 「新状況発生の報告 (hot news)」

2.1で述べたように、第3類は第1,2類と違い、主題や語用論的前提が不在であるため、「変化」ではなく「発生」の事態を表す。つまり、第3類では $le_2$ は一般的な「現時関連性」を有さず、perfective markerの $le_1$ の機能に近いと考えられる。

第3類SVOleの存在を最初に指摘したのは陈 (2004) で、同論によると中国語では17から18世紀にかけて既に「新状況発生の報告(hot news)」を表す第3類SVOleが出現した。

(40) 邓九公笑道“……告诉你，哥哥得了儿子 $le_2$ ！” 清・《儿女英雄传》

[鄧九公は笑いながら言った「…一つ教えよう、兄貴に息子が生まれたよ!」]

そして、perfect表現にhot newsの機能があることを最初に指摘したのはSchwenter (1994) で、同論文によれば、hot newsはperfect表現の他の機能と違って、事態の発生によるある種の結果(result)を語用論的前提に関連付けることで「現時関連状況」を表すのではなく、その発話時との関連性は報告する事態の「ニュース性」<sup>2)</sup>によって保証される。英語では、hot newsは孤立した事件の発生を報告することで新しい談話を始め、(41)のように新聞記事などの出だしに用いられることが多い。さらに同論文は、hot newsはperfect表現の各用法において最も若く、現時関連性を有さないperfective表現の機能に近いと指摘した。

(41) *Rock musician Frank Zappa has died.* A family spokesperson reported... (KTVU news)  
本稿では、第1,2類として成立し難いSVOleは第3類のhot news用法において成立する可能

性があると考えられる。例えば(13b)が(13a)よりも自然なのは、文頭の時間詞“上个月10号”は、SVOLeをhot newsとして解釈する可能性を提示してくれたからだと考えられる。(13) a.??朝鲜领导人坐飞机来北京了。 b.?上个月10号, 朝鲜领导人坐飞机来北京了。

具体的には、まず前述したように(13a)はadjunctにdeicticな情報を含まない第1類として不自然である。そして(13b)では、時間詞の付加によってある実際の状況に関連付け解釈する可能性が提示されたが、時間詞“上个月10号”はその意味から、発生した事態を「前提の変化」と解釈する際にどのように寄与するかは想定し難いので、(38)と違って第2類としても成立し難い。しかし(13b)では、“上个月10号”が高い情報価値を有する文主語「朝鮮の指導者」と並ぶことによって、「何時何時こういうことが起こった」というhot news用法の適用可能性も提示されていると考えられる。(13b)は(13a)よりも自然なのは、(13b)には第3類のhot news用法が適用されているからだと思う。

勿論(13b)では“坐飞机”はやはり伝達上余剰的で、また事態の発生時は“上个月10号”で事態報告の即時性も低く、hot newsとしても文に不自然さが残る。しかしhot newsではSVOLeの表す事態を情報価値のあるものとして報告すればよく、第1,2類のように文の各構成部分がすべて「主題や前提の変化」という解釈を成立させるために寄与する必要がない。つまりhot newsでは各構成部分に一定の情報価値があればよく、ある部分に十分な情報価値がなくても「言う必要のない情報が1つ混入している」というレベルに止まり、文全体の意味解釈や成否に大きく影響しないので、(13b)は(13a)よりも自然なのである。

以上では、(13b)についての分析から第1,2類で成立し難いSVOLeが第3類で自然になることを観察したが、同じ文頭の時間表現が付加され、発生した事態のニュース性も高い(11b)は成立しない。また(11b)の主語をより情報価値の高いものに変えても不自然である。(42)\*上个月10号, 成龙杀人le<sub>2</sub>。 [先月10日, ジャッキーチェンは人を殺した。]

これについて、1.2.4で述べたように条件節に現れる(S)VOleにも同様な現象が見られる。

(16) a. \*杀 (le<sub>1</sub>) 他 le<sub>2</sub> 就让你入帮。 b. 来北京 le<sub>2</sub> 给我打电话。

前述したように、仮定・条件節は実際の時空間に関連づける「現時関連状況」を表し難い環境として、従来(S)VOleが現れ難いとされてきた。これについて黄(2016)は、(S)VOが瞬間的変件事象のachievementを表す場合、le<sub>2</sub>は(S)VOの終了(completion)を表さなくてもよいので「現時関連性」を捨象し条件節に入ることもできるとしたが、なぜle<sub>2</sub>はcompletionを表さなければ現時関連性を捨象できるかについて説明していない。

(14) a.\*我吃饭 le<sub>2</sub> 就去找你。 (15) a.你到车站 le<sub>2</sub> 给我打电话。 b.我吃完饭 le<sub>2</sub> 去找你。

その理由については、le<sub>2</sub>はactivityを表すSVOに対して、必ず主題または語用論的前提に関連付け解釈して、初めてそれらのSVOで表される事態に終結点をマークでき、事態の終了を表すことができると考えられる。具体的には、既に(23)(24)についての分析からわかるように、activityを表すSVOによる単独のSVOLe文では、SVOで表される動作のアスペクト(どの段階まで進行し終了したか)は主題Sの語彙的意味などに基づき

解釈される。そして、以下の(43)(44)で示されているように、第2類 SVOle の場合、SVO のアスペクトに関する解釈は、文の外側の語用論的前提によって特徴づけられている。

(43) A: 张三的病情好点儿了吗? [张三の病状は少しよくなったか。]

B: 他吃饭了。 [彼は食事した。] (食事を終えたかどうかは関心外)

(44) A: 咱们仨去食堂吧。 [我々三人で食堂に行きませんか。]

B: 他吃饭了。 [彼は食事した。] (食事を終えた)

このように、activity の SVO による SVOle は主題や前提に関連づけ解釈されなければ、表している動作の終結点が決まらず事態の終了を表すことができない。一方 achievement の SVO は、表している事態が発生さえすれば終結に至るので、どの段階まで発生したかについては前提に関連づけて解釈されなくても良い<sup>23</sup>。したがって、activity を表す SVO による SVOle は、hot news や仮定・条件節のような主題や前提に関連づけ難い環境に現れると、SVO の表す動作に終結点をマークすることができず、文が不成立となる。

### 3. まとめ

本稿は中国語 SVOle 構文の意味機能及び成立条件について分析した。

結論として、特定の文脈に関連付けられない単独の SVOle 文には第1類 SVOle 構文が適用され、SVO で表す事態の発生によって主題 S に「状態変化」が起きたことを表す。また、SVOle 全体または主題 S が SVOle の外側の語用論的前提に関連づけ解釈される時、第2類 SVOle が適用され、SVO の発生によって SVOle の外側の語用論的前提に何らかの「変化」がもたらされたことを表す。さらに、achievement の事象構造を有する SVO による SVOle は、主題や語用論的前提を含意しない第3類の「新状況発生の報告(hot news)」を表すことが可能で、また仮定・条件節に現れることも可能である。

従来の記述では統一な解釈が難しいと思われる SVOle 文の成否や意味解釈に関する疑問点は、これらの異なる分類への適合性から解釈することができると考えられる。

### 註

<sup>1</sup> 中国語の“了”には、<動作行為の完了>を表す動詞接辞の“了（一般には le<sub>1</sub> と記す）”と、同音異形態で<変化の既実現>を表す文末助詞の“了（一般には le<sub>2</sub>）”があるとされている。

<sup>2</sup> 訳語は木村（2012）による。

<sup>3</sup> 本稿では、専らモダリティ機能を果たす le<sub>2</sub>（肖&沈 2009 の“了<sub>知</sub>，了<sub>言</sub>”）について触れず、主に已然の事象を表す SVOle を研究対象とする。また動詞が文末に来る ba 構文・受身文や自動詞による SVle は、その le が le<sub>1</sub> か le<sub>2</sub> か、それとも le<sub>1</sub>+le<sub>2</sub> かという判断に統語上の基準ははっきりしないので本稿では扱わない。なお、le<sub>1</sub> を伴う SVleOle と SVOle を区別しない。

<sup>4</sup> 木村（2012）では“在厨房”は atelic な静止位置を表し、また中国語では「単純他動詞+裸名詞」

- は atelic な activity を表すとされている。ex. “\*他 1 小时内包 le<sub>1</sub> 饺子 (\*He made dumplings in 1 hour)”。
- 5 「VR 構造」は動作と結果を併せ示す複合動詞で、後方述詞 R は「結果補語」といい前方動詞 V に後接し V の遂行結果として関与者にもたらされる何らかの状況を表す。VR 構造は専ら結果に焦点を置き、aktionsart は [+dynamic][ -durative][ +telic] の achievement であると一般にされている。
- 6 (13a, b) は一見して (10a, b) に平行しているが、(13b) はやはりある程度不自然であるのに対し (10b) は全く自然である。また “上个月 10 号, 小李坐飞机去上海了” は (13b) よりも不自然であることから (13a, b) について (10a, b) と異なる分析が必要であると考えられる。
- 7 (18) 及びそれに対する分析は影山 (1996) より引用。
- 8 adjunct を含む SVO の clause 全体を指す。以下同様。
- 9 この時主題の現時関連性は文脈ではなく発話者の心的動きにより保証される。Kuroda (1972) によれば categorical judgment (猫はそこで眠っている) とthetic judgment (猫がそこで眠っている) を区別し、前者は「a. 断言を行うための準備としてある主体に注意を向ける」と「b. それについて断言を行う」という 2 つの心的動きを含む。第 1 類の主題の現時関連性は a によって保証される。
- 10 (24) では両解釈の優先度の違いが (23) のそれよりも顕著である。その理由について、“病人”の語彙的意味を過不足なく文に反映しなければならないという語用論的動機付けが考えられる。
- 11 このことは前掲の (22) から確認することができる。
- 12 中国語の機能語や構文は概して「文法力 (共起対象との意味的協働に依存せずに、自らが文法的作用の実現を果たす力)」に乏しいと考えられている (木村英樹 2012 など)。本稿では、第 1 類 SVO<sub>lc</sub> は各構成部分の意味価を「主語 S の状態変化を表す」という構文の意味に適合するよう解釈する際の「文法力」が比較的弱く、もとより「S の変化」を何らかの形で提示する SVO のみを結合対象に選ぶと考えられる。紙幅の関係で、詳しい議論は他稿に譲る。
- 13 Givón (1978) によれば、否定形の平叙文はまず対応する肯定文の命題内容を前提として設定した上でそれを否む発話行為であるのに対し、肯定文は前提に対応する否定の命題を含意しない。肯定文の情報伝達: 話し手は聞き手が命題 P を知らない信じ、聞き手に P を伝える。  
否定文の情報伝達: 話し手は聞き手が命題 P を知っている信じ、P が真でないことを伝える。
- 14 中国語では“杀(殺す)”など一般に達成動詞と分類される他動詞も、裸名詞を目的語にとると専ら VO という種類の activity を行うことを伝達上の焦点とし、目的語の状態変化は VO の関心外にあると一般に考えられている (楊 2008 など)。この時、VO 全体は一つの非能格動詞に相当し、例えば“他杀人了”に対する解釈は日本語の「彼は殺人行為に及んだ」に近い。
- 15 論理的終結点を含意しない他動詞は概ね影山 (1996) の「接触・打撃の他動詞」に相当する。
- 16 その他、目的語の名詞句に漸進的变化性 [+incrementality] を備える必要もある。
- 17 木村 (2012) は「数量名形式」を目的語にとる SVO<sub>lc</sub> が「変化」の事態を表し難いと説明したが、具体的になぜ「変化」を表し難いのかについて言及していない。
- 18 前掲の (1) も (34b) と同じように、数量詞 “3 杯” を強く読まなければ成立し難い。



- <sup>19</sup> 太字は焦点を示す。RESULT IN は因果関係でない両事象の先行・後行関係を表す（申 2007）。
- <sup>20</sup> (13a)の容認性判断と解釈は楊（2013）による。実際“坐飞机”を強く読めば(13a)が成立する。
- <sup>21</sup> その理由について1.2.2で楊（2013）の説明を紹介したが、筆者の考えでは adjunct は述語の中心部に比べ統語構造上の必要性が低く、そのコード化は主に伝達上の必要性から動機づけられている。それ故(13a)のように SVO の表す状況全体を S の変化と見なす場合、adjunct が対比焦点として文の自然焦点 VO と競合し文が不自然になる。紙幅の関係で、詳細は他稿に譲る。
- <sup>22</sup> 「情報価値／情報の重要度 (significance)」と「即時性 (immediacy)」を含む（陈 2004）。
- <sup>23</sup> 単純動詞による accomplishment や R が O の結果状態を表す VR 構造による SVOle については、2.2.2 の D, E で述べたように、伝達上の焦点は O に置かれるので、元から SVOle との共起が難しい。また state の SVO による SVOle は、VO という状態への瞬間的変化を表すことができ、その際 achievement と同じように仮定・条件節に現れうる。紙幅の関係で詳しい議論は割愛する。

## 参考文献

- 陈前瑞 2004. <汉语双“了”句的兴衰及相关的理论问题>, 《语法研究和探索 13》: 32-48
- 黄瓚辉 2016. <“了<sub>2</sub>”对事件的存在量化及标记事件焦点的功能>, 《世界汉语教学》第 1 期: 42-58
- 影山太郎 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点』, 東京: くろしお出版
- 木村英樹 2012. 『中国語文法の意味とかたち』, 東京: 白帝社
- 吕叔湘主编 1980. 《现代汉语八百词》, 北京: 商务印书馆
- 申亜敏 2007. 「中国語の結果複合動詞の項構造と語彙概念構造」, 『レキシコンフォーラムⅢ』: 195-229, 東京: ひつじ書房
- 肖治野&沈家煊 2009. <“了<sub>2</sub>”的行、知、言三域>, 《中国语文》总第 333 期: 518-527
- 杨凯荣 2013. <汉语表达功能对“了”的使用制约>, 『中国語文法論叢』:86-106, 東京: 白帝社
- 楊明 2008. 「限界性による事象タイプの転換」, 『人文社会研究』第 16 号: 80-95
- 朱德熙 1982. 《语法讲义》, 北京: 商务印书馆
- Chao, Y. R. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley: University of California Press.
- Croft, W. 1998. The Structure of Events and the Structure of Language. *The New Psychology of Language* : 63-86. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Givón, T. 1978. Negation in Language. *Pragmatics*: 69-112. New York: Academic Press.
- Kuroda, S.Y. 1972. The Categorical and the Thetic Judgment. *Foundations of Language* 9:153- 185.
- Li, N. and Thompson, A. 1981. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: UC Press.
- Schwenter, S. A. 1994. Hot news and the Grammaticalization. *Linguistics* 33: 995-1028
- Sun, C. F. 1988. The Discourse Function of Numeral Classifiers in Mandarin Chinese. *Journal of Chinese Linguistics*. Vol.16, No.2 : 298-322
- Taylor, J. R 1998. Syntactic Constructions as Prototype Categories. *The New Psychology of Language* : 162-186. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

